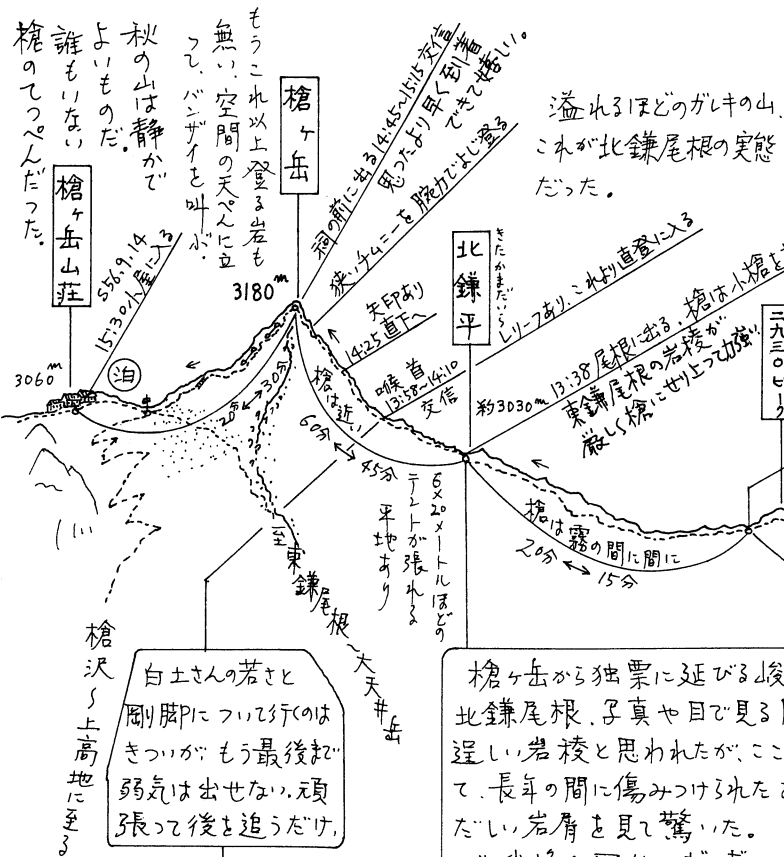


槍ヶ岳・北鎌尾根

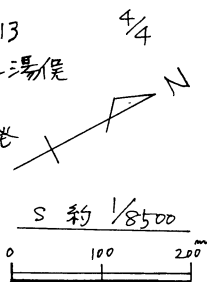


やつとテント三つほど張れるほどの
平地がある尾根に出る。ここが有名
な北鎌平で、槍の穂先まで1時間。

独票を巻き終えても、槍への道は遠く。
左に大天井岳が高くそびえ、右に硫黄岳
が赤々と輝く。登り下りの激しい、荒れ
岩屑の中の踏跡は見え隠れしながら続く。

立体詳細図

1981年 556.9.13
七倉と555出発〜湯俣
晴嵐荘へ9:12着
9月14日 朝3:10出発



遠くから眺めた独票は岩の殿堂で、
堅固で立派に見えたが、近付けば長い
間の風雪は岩を砕き、無惨な崩壊
の姿は地獄絵に見えるほどに殺伐と
しており、とても登る気になれないので、
千丈沢側の踏跡に入って巻くことにする。

これより先、全コース千丈沢側に行く

北鎌沢ノコルからは東京杉並区の白土さんと一緒、
鈴鹿の山に登るような気分。急斜面の尾根を
登る。雲も少し切れて遠くの山々が頭を出し、
「よし、槍まで行くぞ」の気合い込み。

天狗腰掛

岩峰ピーク

北鎌沢ノコル

至十天出合

鉄板のレリーフがある喉首は、
ここから槍ヶ岳登攀への登り口
であることを示しており、見上げ
る岩壁は元来丈で、足場も手
掛りも少々あつて、洞窟の中
を登っていくような感じがある。
全身神経をピリピリさせな
から、最後の底力を振り絞
って、次々確実な岩棚に手
足をかけては高度を稼ぐ。

槍ヶ岳から独票に延びる後、
北鎌尾根。子真や目で見ると、
正しい岩稜と思われたが、ここま
で来て、長年の間に傷みつけられたあ
ざつた岩屑を見て驚いた。
どの岩峰も風化してボロボロ。絶えず
岩屑をはくまき、ガラガラ崩れる落石
の音に恐怖を抱きながらの登高だ。

昔から多くの人が憧れ、風雪の
縦走を果すことなく鬼籍の魂が
無念の涙を流しながら、この黒々
とした岩稜に迷い続けているようだ。

北鎌平でホッとしたのも束の間、
槍の穂先は霧を巻いては振り払い、
見え隠れしながら首をかしげている。
頂上に立つ人の姿も見えないが、
まだ高い。西鎌尾根の壮絶さ。
ここから喉首までがまた大変な岩
稜のルートだ。踏跡も漠然として
岩塊の海だ。浮石も多い。頭よ
り小さな石には乗らないことだ。
過つた岩なだれで千丈沢に下る
であろう。大きな岩塊を選んで
槍の穂先に近づいて行く。

独票を巻き終えたと思ったら、円い大きな手掛
かりのない岩が前方左側に立ちふさぎ、私は
どうして渡ろうかと思案していると、独票に行くと
言われて別れた白土さんかもとど、ここは岩の陰に
ハーゲンが打つてあるから、それに左足を掛けて、
素早く飛び移れば越えせると、うまく渡って
見せ、おれに手を貸してくれる。

突然北鎌沢ノコルから「名古屋のおじさん」と呼ばれて
ビックリ。見上げれば「昨日の昼、晴嵐荘で話をした東京
の白土さんである。コルに到着して話を聞く。
白土さんは昨日午後出発し、北鎌尾根P2でテント泊し、
北鎌沢を覗くと、おじさんが見えたので声を掛けると言う。
実は今日槍ヶ岳に登るの、昨年秋のこと、冬期積雪
期の北鎌尾根を縦走するための荷上げを終えて帰
る途中、天上沢の破損した吊橋を渡ろうとして、(当日
増水のため飛んで渡ることができなかつたため)転落し、
この春まで行方不明となった。その娘の遺影をロケットに
おさめての登山であることを話してくれた。
水俣川の吊橋を渡る前の新しい遭難石碑もその家族の
建てたものであると……そして晴嵐荘の宮沢さん時間毎に
交信しながらの登高と聞く。おれも始めの難コースであり、
「同行」を了解願って一緒に歩くことにした。

二又にはケルンが横たっており、
北鎌沢ノコルへは、右手の真すぐ
尾根に突き上げる急斜面の沢
を登って行く。塊石と岩屑が終
始ゴロゴロと堆積し、登りづら
い。浮石には気をつけたい。
左俣は最後岩壁で一般的でな。

単独行 装具はザック10kgで一気に登る計画
渡渉点より、天上沢に沿って約1時間
遡ると、右から入る大きな谷に出合う。
これが北鎌沢で、出合口の中は20mもあり、
明るく大きな谷である。ケルンの上にはレリー
フがあって、ひと休みした後、この塊石の谷
を登ること500mで二又に着く。

